カーボンフットプリント制度試行事業
カーボンフットプリント・ルール検討委員会
第８回会合　議事要旨

日時：　平成２３年３月９日（水）１５：３０～１７：３０
場所：　KKR ホテル東京　１０階　瑞宝

●出席者
稲葉委員長、平尾副委員長、玄地委員、齋藤委員、須田委員、辰巳委員、西尾委員
（出席７名）

●議題

１．各種ＷＧ等の報告及び審議について
　①「サービス検討ＷＧ」について（活動報告及び審議）
　②「表示の多様化検討ＷＧ」について（報告案件）
　③「カーボンフットプリントの新たな表示の在り方に関する研究会」について（報告案件）
２．広範囲ＰＣＲを用いた実証事業の報告
３．平成２２年度ＣＦＰ制度試行事業の成果について
４．検証スキーム検討委員会の報告について
５．海外動向調査の報告について
６．平成２３年度ＣＦＰ制度試行事業の予定について

●議事概要
・　議題１．～議題６．につき、事務局より説明が行われた。
・　議題１．①について検討・審議が行われた。
・　議題１．②について、報告内容の確認および質疑応答が行われた。
・　議題１．③について、報告内容の確認および質疑応答が行われた。
・　議題２．～議題６．について、報告内容の確認および質疑応答が行われた。

（１）「サービス検討ＷＧ」について（活動報告及び審議）

・　ＷＧで検討した内容を基に、「サービスに関するＰＣＲ策定およびＣＦＰ算定・検証の考え方」を運用ルールとして定め、来年度の試行事業においてサービスに関する実証実験を実施する。
・　実施方法の詳細については、以下の指摘事項に対する考え方を整理した上で実行すること。
　➢　配分の考え方の中に、サービス利用者間による配分への注意が挙げられているが、機能単位あたりの排出量が算出できていれば、利用者によって消費されるサービスの量が異

なっても配分に困難は生じない。むしろ同じ財を用い、異なるサービスを提供している際の配分に注意すべき。

- ➢ 今後の進め方として、個々のＰＣＲに委ねられる部分が大きいので、慎重に進めること。

（２）「表示の多様化検討ＷＧ」について（報告案件）

- 来年度の実証実験にむけて、前回指摘事項を踏まえた実施方法の考え方の整理が事務局より示され、委員会により了承された。
- 商品のＣＦＰ情報にすぐアクセスできるようなウェブサイトの改善について、開発状況の確認が行われた。
  - ➢ 市場流通している商品については、新たに専用のページ（「ＣＦＰ対象製品」ページ）を設置して商品情報にアクセスしやすくした。
  - ➢ 今後も引き続き改善を行っていく予定。
- マークは店頭での視認性を高めることが重要な目的であり、マークに全ての情報を盛り込むことは困難である。そのためウェブサイトも含めた形で情報発信を行うことが重要である。多様な表示方法について消費者受容性の実験を行う際も、マーク単体のみではなく、ウェブサイトと組み合わせた情報発信に対する評価を行って欲しい。例えば、マークを見た消費者が、どれくらいウェブサイトにアクセスしているのかといった追跡調査などができるとよい。
- 消費者の意見だけではなく、事業者の意見も収集してもらいたい。
- 資料５の１ページ最終行「適当であれば」という表記は「適切であれば」に修正する。

（３）「カーボンフットプリントの新たな表示の在り方に関する研究会」について（報告案件）

前回、「来年度、オフセットとの連携についてはＣＦＰ制度試行事業とは別の枠組みで実証実験を始めたい」との報告および意見交換が行われた。これを踏まえ、今回、研究会事務局から実証実験の進め方に関する補足説明が行われ、さらに意見交換が行われた。

- マークに付記するカーボンニュートラルという表現は一般的にバイオマスに対して使用されており、伝わりにくいのではないか。
- 「ゼロカーボン」と「カーボンニュートラル」の２つの表示方法については、本委員会においても意見が分かれるところかもしれない。まずは、実証実験をしてみてもよいのかも知れない。
- ＣＦＰ制度試行事業とは別の枠組みで実証実験を行うとすると、１つの商品にマークが２つ併記される可能性を想定しているのか。本来であれば、ＣＦＰマークが貼付されることが前提であるべきではないか。
- 同じデザインのマークを使用するため、別事業というよりは表示の多様化の一形態に見える。ＣＦＰ制度試行事業とは別の枠組みで進める方針とのことだが、もっと十分に議論を尽くした上で、ＣＦＰ制度試行事業の枠組みの中でやる方法も考えられたのではないか。
- カーボンニュートラル以外のフレーズも検討して欲しい。
- 当面は国内クレジットに限定することもやむを得ないが、事業者の参加を促すためにも、将来的に他のクレジットを選べるように検討して欲しい。

・　実証実験の実施については前回委員会でも合意しているので、実際の実証実験の仕組みについては、今回の意見も踏まえ、十分に議論してから進めて欲しい。

（４）広範囲ＰＣＲを用いた実証事業の報告

・　今年度は食品６社の参加にとどまったことから、来年度はエネルギー使用型製品を含む他の分野での知見を増やす目的で、引き続き広範囲ＰＣＲを用いた実証事業を継続する。
・　マークに「広範囲ＰＣＲ」との表記は不要ではないか。表示する場合は、消費者に何を伝えたいのかを明らかにし、それが伝わるように改善すべき。
・　来年度の実証実験では、広範囲ＰＣＲやカーボンニュートラルも含めた多様な表示について、何を確認するべきなのか、十分に検討して実験を設計すべき。また、全てのマークが十分に市場流通するとは限らないので、会場テストの活用も検討すべき。
・　広範囲ＰＣＲの目的として事業者の負荷削減が挙げられていた。これに対して、ＰＣＲ作成に関わる負荷は軽減されたが、広範囲ＰＣＲはシステム境界を広めに取っているため、細かいデータをカットオフせず収集して算定・検証の負荷が増加したケースがあった。
・　広範囲ＰＣＲにおいては、補足説明資料に示される細かい算定条件の違いから、通常のＰＣＲより比較が困難である。事務局が、先行事例をもとに補足説明資料の算定条件をそろえれば可能かもしれない。

（５）検証スキーム検討委員会の報告について

・　事業者が負担するコスト及び迅速性については、今年度事業に参加した検証員にヒアリングをかけ、現在整理をしている。更なるコスト削減や時間の短縮について、今後実証実験を通じて検討していく。

以　上